

〔研究ノート〕

## 前期中等教育（中学校第1学年及び第2学年）における タグラグビーの指導法と普及に関する考察

早坂 一成

スポーツ健康学部

### 要　旨

本研究は、2017（平成29年）7月に改訂された中学校学習指導要領解説保健体育編に例示されるタグラグビーについて、前期中等教育（中学校第1学年及び第2学年）を対象に「知識・技能」、「思考力、判断力、表現力」、「学びに向かう力、人間性等」の観点から、より具体的、実践的に授業及び教育活動が行えるよう考察を加えることを目的とした。さらに2021（平成33）年4月1日からの全面実施に向けて、より多くの指導者、学習者がタグラグビーを、より深く経験できるように技能の向上に加え、ラグビーに起因する文化や教育的意義とタグラグビーの相関関係を探求した。

キーワード：タグラグビー 学習指導要領解説 前期中等教育 指導法

## A Newly Devised Model of Teaching Tag Rugby

- A Proposal Geared Towards Lower Secondary Education level -

Kazunari HAYASAKA

Faculty of Health and Sports  
Nagoya Gakuin University

---

発行日 2018年2月28日

## 1. はじめに

2017（平成29）年7月、前期中等教育学校において2021（平成33）年4月から施行される中学校学習指導要領解説保健体育編にタグラグビーが例示された。

初等教育においては平成20年に改定され、2011（平成23）年に完全実施された小学校学習指導要領解説保健体育編においても、タグラグビーが新たに例示されていた。ボール運動系の領域として、低・中学年の「ゲーム」、「ボールゲーム」、「鬼遊び」の構成から、第3学年及び第4学年では陣地を取り合う易しいゲームとして、第5学年と第6学年では、より技能及び戦術の向上が期待される簡易化されたゲームとして行われてきた。

一方、前期中等教育においては領域の例示が期待されたが、タグラグビー自体が初等教育に例示されるまで検討するには至らなかった。しかし、初等教育において2011年に例示され、授業での取り組みが始まると教育現場での研鑽はもちろん、日本ラグビー協会普及育成委員会等の活動の効果もあり、授業として多くの小学校で取り組まれるようになった。さらに、指導者の育成の観点からも、積極的に多くの授業づくりに関連する活動が盛んになった。また課外活動での事例研究や全国小学生タグラグビー選手権大会の開催等、教科を超えた競技の普及がみられるようになった。これらの背景も踏まえ、2021年施行される中学校学習指導要領解説保健体育編に例示される一因となり得たと推定される。このような現状を踏まえ、例示の内容について、タグラグビーは他のゴール型競技種目とは異なった特性を持っており、今回の学習指導

要領で改訂される知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等の育成についての詳細を検討していくことは意義のあることと言える。

加えて、身体接触を伴う競技特性からフェアプレーの精神、スポーツmanshipを尊重してきたラグビーの文化的な価値、特に今回の改善の具体的な事項である「学びに向かう力、人間性等」に大きく寄与することが期待される。以上より本研究においては、2021年に施行される中学校学習指導要領解説保健体育編の、特に中学校第1学年及び第2学年への、タグラグビー例示に関する指導法の向上と普及のために必要な内容を探求することを目的とした。

## 2. 新学習指導要領の改訂内容と指導法

### 2.1. 改訂の背景

タグラグビーは中学校学習指導要領保健体育編において「球技」「ゴール型」の領域に例示された。しかしながら、以前まで「ゴール型」については、バスケットボール、ハンドボール、サッカーの中から適宜取り上げる、とされていたが、それらの競技種目に加わったわけではない。「学校や地域の実態に応じて、タグラグビーなどの運動についても履修させることができる」としているが、原則として、他の運動は、内容の取扱いに示された各運動種目に加えて履修されることとし、学校や地域の特別の事情がある場合には、替えて履修させることもできることとする。」と例示された。

前回施行された、学習指導要領解説には巻末参考資料にのみ、ゴール型の例として、ラグビーとともに記載されていたのであるが、今回の施行で「内容の取り扱い」に例示された。この

ことからも中学校の保健体育の領域として実践報告、実践例や研究の観点からも、今後それらの蓄積が一層求められる。それゆえに今回改訂される「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間力等」の指導内容全般において、詳細な研究が必要とされるのではないだろうか。さらに例示された使命としては、より多くの指導者、学習者にタグラグビーの普及の実績が不可欠であると考えられる。

## 2.2. 「知識」

今回の改訂では、球技の「知識・技能」について第1学年及び第2学年においては以下の事項を身に付けることができるよう指導するとある。

「次の運動について、勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、球技の特性や成り立ち、技術の名称や行い方、その運動に関連して高まる体力などを理解するとともに、基本的な技能や仲間と連携した動きでゲームを展開すること。」

タグラグビーはラグビーの競技特性の一つである身体接触を避けて、起こり得る傷害へのリスクを極力軽減した、すなわち健康・安全に留意した競技特性を持つ。さらに他のゴール型の競技種目とは異なり、ボールを保持したら防御されるまで走ることができるという技能特性を持つ。そもそも、なぜそのプレーが許されるのか。また許されるが故に生起するルールはどのようなもので、その成り立ちなどを考えさせることは学習者にとって新たな知見の獲得であると言えよう。

一方で比較的運動を得意としない学習者に対しても、攻撃では防御を受けても速やかに他の

仲間にボールをパスし、チームのプレーヤーとして連携してゲームを展開させる集団的技能の向上も、他の競技種目同様に効果があると考えられる。

第1学年・第2学年の球技領域の知識については以下のように例示されている。

<例示>

- ・ 球技には、集団対集団、個人対個人で攻防を展開し、勝敗を競う楽しさや喜びを味わえる特性があること。
- ・ 学校で行う球技は近代になって開発され、今日では、オリンピック競技大会においても主要な競技として行われていること。
- ・ 球技の各型の各種目において用いられる技術には名称があり、それらを身につけるためのポイントがあること。
- ・ 対戦相手との競争において、技能の程度に応じた作戦や戦術を選ぶことが有効であること。
- ・ 球技は、それぞれの型や運動種目によって主として高まる体力要素が異なること。

これらの例示からタグラグビーに起因する特殊性からみると以下、2点あげられる。1点目はプレーヤーの数である。本来ラグビーは1チーム15人ないし7人で行われる競技である。それをタグラグビーの競技規則では1チームの人数を4名ないし5名と定めている。この変更により1人あたりのボールを保持する機会が多くなり、ランニングプレーの生起数も増加することが予想される。必然的に全身持久力はもちろん瞬発力、敏捷性といった行動体力の向上に繋がるのは容易に予想され、それらの帰納的な研究が求められる。一方で、1チーム当たりの人数が少なくなることにより、ラグビーの持つ集団的な特性が

失われてしまう危惧も想定される。しかし、タグラグビーにおけるランニングプレーの攻撃後、相手防御に捕まる時（以下、タグと表記する）に、仲間に最善のプレーを選択してパスを行い、次のプレーヤーに託すという行為は、まさに集団対集団、個人対個人で攻防を展開する醍醐味と言える。

2点目は競技の高度化への期待である。タグラグビーは1990年代からニュースポーツとして身体接触を避け、誰でも簡易的に行えるよう開発された。そのタグラグビーが学校教育に導入されることになったのであるが、例示の「学校で行う球技は近代になって開発され、今日では、オリンピック競技大会においても主要な競技として行われていること。」という、いわば競技の高度化の知識の習得の観点からも興味深い。なぜなら、中世より競技として形成されてきたラグビーが、競技の普及を目指す大衆化を求め、新たなタグラグビーを開発し、そのタグラグビーを経験した学習者がワールドカップやオリンピックに興味を持ち、さらには出場する例が生起することは競技の「高度化」、「大衆化」の相関関係を裏付けることになる。特に近年では2016年のリオジャネイロオリンピックにおいて7人制ラグビーが正式種目として採用され、日本も男女ともに予選を勝ち上がり活躍した。その選手の中で、女子ではタグラグビー出身者の選手が選出されたことは、それを裏付ける好例となり得る。

### 2.3. 「技能」

次にゴール型の技能については第1学年及び第2学年については「ボール操作」と「空間に

走り込むなどの動き」に分類されて例示されている。

#### 「ボール操作」<例示>

- ・ ゴール方向に守備者がいない位置でシュートをすること。
- ・ マークされていない味方にパスを出すこと。
- ・ 得点しやすい空間にいる味方にパスを出すこと。
- ・ パスやドリブルなどでボールをキープすること。

「ボール操作」の例示については「ゴール方向に守備者がいない位置でシュートをすること。」はタグラグビーでは若干の言い換えが必要になる。なぜなら、他の競技で使われるゴールはタグラグビーではゴールライン先のインゴールである。また、シュートもトライと言い換えなければならない。それゆえタグラグビーでは「ゴールライン方向に守備者がいない位置でトライをすること。」となる。

また「ゴール方向に守備者がいない位置でシュートをすること。」「マークされていない味方にパスを出すこと。」の例示は他競技種目同様にオーバーナンバー（数的優位）を作り出すための指導法が主になる。ここで留意したいのはレフリングの汎用性である。初めて行う又は技能の習得が十分ではない学習者は、ボールを前にパスするスローフォワードや前方にボールを落とすノックオンの反則を生起させてしまうことが多い。それらを厳密にジャッジしてすることは、技能と戦術の停滞を招いてしまうことになる。つまり、チームの習熟度に応じたレフリングが必要になる。その際にはレフリングの指針において、一定の基準を保たらなければな

らない。不公平な判定はもちろんあってはならないが、意図的な反則を看破できるように、またゲームの中で技能の向上を促すレフリングが求められる。

最後の「パスやドリブルなどでボールをキープすること。」についても若干の解釈の変更が必要になる。タグラグビーではドリブルは競技規則上存在しない。代わりにランニングプレーが許されている。言い換えると「パスやランニングなどでボールをキープすること。」となる。その際に留意することはパスの考え方である。パスを選択する判断をする際、時間が相当に少ないので、正確なパスや判断が困難な場合は、防御のタグを受けてからパスを行う選択を促すことも選択肢の一つである。なぜなら防御のタグを受けた場合、直ちに止まることが求められ、3秒3歩以内にパスを行わなければならぬからである。これは競技規則上の目安であるので、3秒考えられる、3歩歩けることが許されるわけではない。その間、防御プレーヤーはタグを手渡しで返すまで防御できないので数的有利、すなわち、パスをして最も有効にランニング又はパスを行える仲間に探すプレーの選択が可能となる。このような競技特性はゴール型球技の学習に適していると考えられる。

#### 「空間に走り込むなどの動き」<例示>

- ・ ボールとゴールが同時に見える場所に立つこと。
- ・ パスを受け取るために、ゴール前の空いている場所に動くこと。
- ・ ボールを持っている相手をマークすること。

「ボールとゴールが同時に見える場所に立つこと。」では競技特性から「ボールと仲間（守備者）が同時に見える場所に立つこと。」と言いたい換えられるのではないだろうか。タグラグビーではゴール、すなわちゴールラインの先のインゴールへ目指す正確なシュートを求められているわけではない。パスやランニングプレーで地域の前進を図った後に、容易にインゴールに走り込み、得点することができる。それゆえ攻撃時には素早くボールキャリアーである仲間と防御の位置関係を把握しオーバーナンバーのポジションに走り込めるかが学習課題となる。防御時にはオープンプレーにおいて、常に相手ボールキャリアーの動きを視野に入れながら、仲間と適切な距離を保つ防御ラインの形成が課題である。またタグの直後は防御課題の達成の絶好の機会と言って良い。なぜなら、タグを生起させた守備者は相手へタグを返却するまで防御できないからである。そのため、必然的にオーバーナンバーが生起して攻撃側のチャンスとなる。その際にも仲間の空いたスペースを埋めるという学習課題を達成できるか否かを検討できる場面である。

次に「パスを受け取るために、ゴール前の空いている場所に動くこと。」であるが、この例示はタグラグビーには該当しない。なぜならパスを前方で受け取ること自体がスローフォワードの反則になるからである。しかし、この例示に対しては、前方へのパスがなぜ禁じられているのか、競技特性を理解する機会と考えられる。仮に前方へのパスが認められると、球技の技能を制限するルールがタグラグビーにおいて皆無になってしまうのである。いわば、バスケットボール、ハンドボールにおいてはドリブルを用

いなくとも地域の前進を図れる、サッカーにおいては、フィールドプレーヤーが肩より下方でボールを扱い、地域の前進を図れることができる状態であり、競技特性が消失すると考えて良い。また攻撃側が前方でパスを受け取ることが可能だとするとラグビーの競技特性である待ち伏せ行為の禁止、すなわちオフサイドの概念も消失してしまう。それゆえ、例示としては「パスを受け取るために、ボール保持者の後方の空いている場所に動くこと。」と言い換えられるのではないだろうか。

以上、まとめるとタグラグビーでは以下のように例示を読み換えることが望ましい。

#### 「ボール操作」<例示>

- ・ゴールライン方向に守備者がいない位置でトライをすること。
- ・マークされていない味方にパスを出すこと。
- ・得点しやすい空間にいる味方にパスを出すこと。
- ・パスやランニングなどでボールをキープすること。

#### 「空間に走り込むなどの動き」<例示>

- ・ボールと仲間（守備者）が同時に見える場所に立つこと。
- ・パスを受け取るために、ボール保持者の後方の空いている場所に動くこと。
- ・ボールを持っている相手をマークすること。

### 2.4. 「思考力、判断力、表現力等」

球技領域の「思考力、判断力、表現力」については「攻防などの自己の課題を発見し、合理的な解決へ向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝える事。」の事項を身に付ける事ができるよう

指導することが示されている。

また、例示は以下のように示されている。

#### <例示>

- ・提示された動きのポイントやつまづきの事例を参考に、仲間の課題や出来映えを伝えること。
- ・提供された練習方法から、自己やチームの課題に応じた練習方法を選ぶこと。
- ・学習した安全上の留意点を、他の学習場面に当てはめ、仲間に伝えること。
- ・練習やゲームの場面で、最善を尽くす、フェアなプレーなどのよい取り組みを見付け、理由を添えて他者に伝えること。
- ・仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた活動の仕方を見付けること。
- ・仲間と話し合う場面で、提示された参加の仕方に当てはめ、チームへの関わり方を見付けること。
- ・体力や技能の程度、性別等の違いを踏まえて、仲間とともに楽しむための練習やゲームを行う方法を見付け、仲間に伝えること。

思考力、判断力、表現力等については指導に際して「第1学年及び第2学年においては、習得した知識を用いて仲間に課題や出来映えを伝えるなど、生徒が習得した知識を基に解決が可能な課題の提示の仕方を工夫することが大切である。」とされている。

そこでタグラグビーの競技特性から上記の例示に対して留意すべき点を挙げる。学習や練習、課題解決において向上を停滞させる要因はルールである。ゴール型の球技でボールを前方にパスをできないルールは、学習指導要領解説に例示されている他のゴール型競技種目には皆無で

ある。それゆえに学習初期の段階では「技能のつまずき」が発生することが容易に想定される。なぜならボールを保持しながら走る「ランニングプレー」を行いながら後方にパスをすることは、初心者にとって相当に難しい技能だからである。そこで学習内容としては、他のゴール型競技と同様にシュートの練習、タグラグビーではトライの練習を行い、得点することの喜びを味わわせることが有効である。またゲーム形式の場合は、意図的または明らかなスローフォワード以外は厳しく取り締まらない寛容なレフリングも一定の判定基準を示せれば、技能の向上に効果をあらわすであろう。

## 2.5. 「学びに向かう力、人間性等」

学びに向かう力、人間性等では「球技に積極的に取り組むとともに、フェアなプレーを守ろうとすること、作戦などについての話し合いに参加しようとすること、一人一人の違いに応じたプレーなどを認めようとすること、仲間の学習を援助しようとすることなどや、健康・安全に気を配ること。」の事項を身に付ける事ができるよう指導することが示されている。

また、例示は以下のように示されている  
〈例示〉

- ・ 球技の学習に積極的に取り組もうとすること。
- ・ マナーを守ったり相手の健闘を認めたりして、フェアなプレーを守ろうとすること。
- ・ 作戦などについての話し合いに参加しようとすること。

- ・ 一人一人の違いに応じた課題や挑戦及び修正などを認めようとしてすること。
- ・ 練習の補助をしたり仲間に助言したりして仲間の学習を援助しようとしてすること
- ・ 健康・安全に留意すること。

タグラグビーを教材として用いる場合、フェアプレーやスポーツマンシップの観点からはラグビーと同様に長い歴史の中で培っていた伝統が「学びに向かう力、人間性等」の例示の理想であろう。例えば「One for all , all for one」「ノーサイドの精神」の文化である。互いに試合を戦ったプレーヤーが試合終了となれば味方相手関係なく、レフリーに対しても互いの健闘を讃え合う文化は周知されていると考えられるが、日本のこの精神はさらに強くその文化を継承している。タグラグビーにおいてもこの精神は同様に定義づけられている。この精神を大いに尊重し指導場面で発揮されることが望ましい。またこの精神を具現化するラグビーの競技規則の中のラグビー憲章には以下5つの精神が記されている。

- ・ 品位 (Integrity) : 品位とはゲームの核をなすものであり、誠実さとフェアプレーによって生み出される。
- ・ 情熱 (Passion) : ラグビーに関わる人々は、ゲームに対する情熱的な熱意を持っている。ラグビーは、興奮を呼び、愛着心を沸かせ、世界中のラグビーファミリーとの一体感を生む。
- ・ 結束 (Solidarity) : ラグビーは生涯続く友情、絆、チームワーク、そして、文化的、地理的、政治的、宗教的な相違を超えた忠誠心につながる、1つにまとまつた精神を

もたらす。

- ・ 規律 (Discipline) : 規律は、ゲームに不可欠なものであり、フィールドの内と外の両方において、競技規則、競技に関する規定、そして、ラグビーのコアバリューの順守を通じて示せる。
- ・ 尊重 (Respect) : チームメイト、相手、マッチオフィシャル、そしてゲームに参加する人を尊重することは、最も重要である。

これらの精神を深く理解してタグラグビーの单元、指導案作成、指導場面で取り組むことが期待される。特に攻撃の場合は、レフリーの目をかいくぐって、手で押さえたり、体を回転させたりするなどのタグを取らせないような動きが見られる。その行為はしてはいけない行為、恥ずかしい行為と学習者に理解を促すことができれば、必然的に正しいプレーを行い安全面においても望ましい授業が展開されるであろう。

### 3. 学年段階の接続に向けて

今回の学習指導要領でも体育分野の内容において学年段階の接続は「学校段階の接続及び発達の段階のまとまりに応じた指導内容の体系化の観点から、従前どおり、第1学年及び第2学年と第3学年に分けて示すこととした。」とされている。ゴール型球技おいても中学校1・2年生と中学3年生に分けてボール操作とボールを持たないときの動きの例が示されている。

今後、引き続き中学校第1学年及び第2学年のタグラグビーの研究や事例報告を積み重ね、より一層技能及び戦術の適切な指導法を確立するとともに、第3学年でも同様に学習指導要領のゴール型球技におけるタグラグビーの詳細を明らかにして、より適切かつ安全に行える指針

の確立が望まれる。

さらに、高等学校保健体育の指導内容の体系化からみると、中学第3学年と高等学校第1学年は同じカテゴリーで学習内容の順序性が示されている。これまで高等学校学習指導要領解説保健体育編ではボール操作とボールを持たないときの動きの例が示されている。ところが高等学校ではゴール型球技でラグビーが取り上げることができる。つまり、今後、小学校から中学、高等学校まで学習内容の順序性をにらんだタグラグビー及びラグビーの指導内容の体系化が望まれる。例えばタグラグビーとともにタッチラグビーを経験し、よりスピーディーな攻防を経験するとともに、身体接触を伴うコンタクトプレー、スクラム・ラインアウトなどのユニットプレーなどの技能の理解なども今後の課題になり得るだろう。

### 参考文献

- 文部科学省, 小学校学習指導要領解説保健体育編, 2008年, 東山書房
- 文部科学省, 中学校学習指導要領解説保健体育編, 2017年  
[www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro.../1234912\\_009.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro.../1234912_009.pdf)
- 文部科学省, 高等学校学習指導要領解説保健体育編, 2009年, 東山書房
- 日本ラグビー協会, 普及戦略 2016-2020, 2016年,  
<https://www.rugby-japan.jp/RugbyFamilyGuide/senryaku.html>
- 齊藤武利他 2008, 『小学校必修クラブにおけるタグラグビーの事例的研究』, 白鷗大学教育学部論集, Vol12, pp. 357-368

前期中等教育におけるタグラグビーの指導法と普及に関する考察

木内誠 今関豊一 2014, 『小学校体育授業におけるタグラグビーの指導に関する研究：パスの状況判断に着目して』, ラグビーフォーラム No. 7, p. 7

鈴木秀人, だれでもできるタグラグビー, 2009

年, 小学館

ワールドラグビー, 競技規則 Rugby Union, 2017

年, 日本ラグビー協会

早坂一成 2016, 『ラグビーの普及およびスポーツ施設開放事業も関する取り組み』, 名古

屋学院大学研究年報, No. 29, pp49–56